

幼児の社会的・感情的発達に関する研究（Ⅱ）

——社会的発達を中心に——

松田君彦・大坪治彦・島田俊秀

(1984年10月15日 受理)

Research on the Social and Emotional Development
of Young Children (II): Social Development

Kimihiko MATSUDA, Haruhiko OHTSUBO and Toshihide SHIMADA

はじめに

個人がその社会のメンバーとなるための知識や技能を習得していく過程を社会化と呼ぶが、この中には、社会がどのようにして個人をそのメンバーにつくり上げていくかという側面と、個人がどのようにして社会のメンバーとなっていくかという側面とが含まれている。

しかし、いずれにせよ具体的には、この社会化の過程は、その個人が所属したり関係をもったりする集団や人間関係の中で進行するわけであり、こうした集団や組織は「社会化のエージェント(担い手)」と呼ばれる。社会化のエージェントは、いわば社会の代理人として、ひとりひとりの個人に働きかける機能をもっている。そして、家族や交友関係、地域社会、保育園、幼稚園・学校などの教育機関、マス・メディアなどは重要な社会化のエージェントである。

また、一方子どもの社会性の発達にとっては、垂直的構造における社会化と水平的構造における社会化が不可欠とされているが、親や教師の指導を媒介とする家庭や学校は前者の代表的な例であり、学校や地域社会での仲間関係は後者の代表的な例である。ことに幼児期は、対人関係や社会性の発達という点から考えた場合、それが縦型から横型へと移行し始める重要な時期に相当している。

そこでここでは、家庭および保育園、幼稚園における子どもの社会的行動を、対大人関係、対子ども関係という視点から分析することによって、子どもの対人関係や社会性の発達過程を調べてみた。

また、社会化の対象である子どもが幼少であればあるほど、垂直的構造における社会化、つまり親や教師の与える社会化の影響は大きい。同一の子どもに対して、この両者はある時には同じように、またある時には異なったように働きかけるだろうし、また、子どもの行動に対する判断や評価の仕方も異なっている。子どもの社会化を考える場合、この両者の間に見られるズレは、決して無視し得ない重要な意味をもつと思われるので、この点も併せて考えてみたい。

調査方法

調査は質問紙形式によって実施したが、調査目的、方法、対象、期日等については、前掲の論文(『幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅰ)——方法論を中心に——』、島田・松田・大坪;1985)に詳しく述べているので、ここでは社会的発達に関する質問項目についてのみ、その概略を以下に説明する。

社会的項目は、接触(社交性)、依存(利用)、愛情(同情・好意・親切)、支配(指導・命令)、従順(協調)、拒否(抵抗・敵意・からかい)、競争(自慢)、模倣、責任を負う(規則を守る)、自律性(自我意識)といった合計10個の領域から構成されているが、この各領域の質問項目はさらに、対大人関係、対子ども関係に分けられている(最後の2つの領域では、子どもと大人を含んだ全般的な対人関係が問われているので例外)。質問の項目数は領域によってまちまちであるが、全体では大項目(その領域に関する全般的な傾向を問う項目で、各領域とも対大人関係で1個、対子ども関係で1個設けてある)が18個、小項目(具体的な問題や場面における傾向を問う項目で、対大人関係、対子ども関係に数個ずつ設けてある)が101個の、合計119個である。

本調査の一つの大きな特色は、一人ひとりの園児に関する各質問に対して、担任の教師と親の両者から回答を求めた事である。回答の方法は、「いつも」、「ときどき」、「ほとんどない」の3件法によった。

結果および考察

全体的な結果については、次の大坪らの論文(『幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅲ)——感情的発達を中心に——』、大坪・島田・松田;1985)の末尾に一括して掲載しているので、ここでは各領域での顕著な結果や、注目すべき反応が得られた項目についてのみとりあげ、考察を加えていくことにする。

ただし、結果の解釈にあたっては次の点を十分に留意しておく必要がある。それは、子どもが園において出会う大人や子どもと、園以外の親の目に触れるような場面で出会うそれとは、いろんな面から等質だとは言えない点である。たとえば、子どもが園で出会う大人といえば、たいていの場合が保育士・教師に限られているが、後者の場合では、家族や親戚の大人とか、顔なじみの近所の大人など範囲が広く、質的にもいろんなものを含んでいる。対子ども関係についても同様である。したがって、同じ質問項目であっても、そこで問題にされているような態度や行動を子どもが園でとった場合と、家庭などの園以外の場所でとった場合とではその意味が異なってくることも考えられるので、同一項目についての保育士・教師の回答と親の回答を単純に同次元で比較し、論じるわけにはいかない場合もある。

1. 接触(社交性)

幼児が自分の家族以外の者との接触を試みる場合には、そこにいくつかの大まかな段階を見るこ

とができる。

① 興味や関心を抱いた相手に対して遠くからながめたり、近くまで寄ってはみるが、なんら直接的な働きかけや交渉をもととしない段階。

② 控え目ながら、その人の身体に触れたり押ししたり相手の反応を見ようとする。あるいは奇抜な言動で相手の注意を引こうとする段階。

③ 相手と実質的な交渉を持つ。つまり、ある活動を共有しようとして相手に話しかけたり、意味のある活動を展開しようとする段階。

④ 相手への働きかけが質・量ともに向上し、より深い特に親しい関係を作ろうとする段階。

具体的な場面で、子どもがどの段階の行動をとるかによって、大まかながらその相手との対人関係の深さを知ることができる。

(1) 対大人関係

まず、全般的な傾向を大項目の結果からみてみると、大人への接触の仕方の発達的变化が、園の評価と親の評価では、まったく違った形で現われることがわかる。園の評価では、大人（保育・教師）への子どもの接触は、3歳児を除けば、年齢と共に「いつも」接触している傾向が徐々に増えてくるのに対して、親の評価では反対に年齢と共に減少していく傾向を示している（図-1）。そして、これと全く同じ現象が小項目の中にもいくつか見られる。

小項目への反応を前述した大まかな4つの段階分けに従って見ていくと、①の段階である「大人

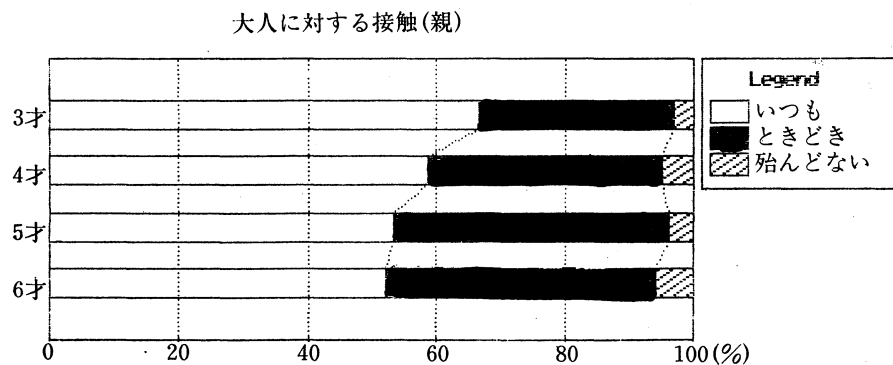
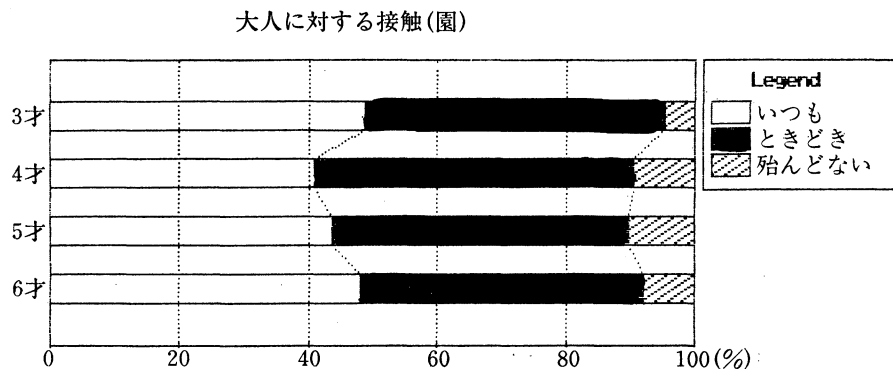


図-1 大人に対する接触

の方へ近づきだけ、そばに立つだけ」の項目では、園と親の評価には目立った差はみられない。特に園での評価では発達的な変化もみられない。

次の②の段階に相当する「大人にさわったり、押したりする」、「大人の注意をひくため、派手にふるまう」、「大人の注意をひくため、いたずらをする」の3項目では、園での評価でも親の評価でも「いつも」とか「ときどき」への反応は年齢が進むにつれて減少し、「ほとんどない」が増加する傾向がみられる。

ところが、③の段階にあたる「大人に声をかける」とか「大人に何かを見せる」、「大人に話しかけてくる」の3項目では、大項目におけるのとほとんど同じ反応パターンが現われている。つまり園では、3歳児を除けば、「いつも」が年齢が進むにつれて増大するのに、親の評価では逆に減少するのである。もっとも、「ときどき」と「いつも」の2つの反応を合わせれば、園でも親でも、どの項目においても90%前後を占めてほぼ似たようなパターンを示す。

発達的に考えた場合、一般的には③よりも②の方が前の段階であると考えられるが、「いつも」とか「ときどき」が②より③で多いのは、すでに3歳以降になれば、他者とのかかわり方の主流が②よりも③に移っているためではないかと思われる。しかし、③に相当する行為が園の評価では年齢の上昇につれて増加しているのに対し、親の評価では逆に減少しているのはどうしてだろうか。

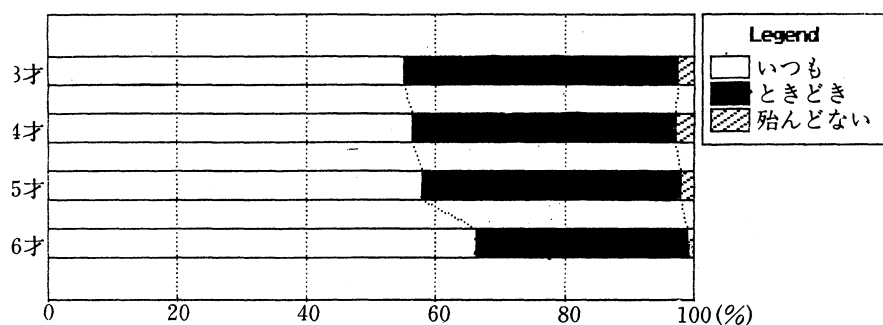
(2) 対子ども関係

大項目で一般的な傾向を見てみると(図-2)、4歳と5歳に対する親の評価で、「いつも」への反応が、3歳・6歳に比べて10%程度落ち込んでいる点が目につくが、「いつも」と「ときどき」の反応を合わせると、どの年齢群でも100%近くになり殆んど差は見られなくなる。この点は園の評価でも同様である。園の評価では、親の場合と比較すると、はっきりとした発達的な推移が読み取れる。子どもの年齢の上昇につれて、「いつも」への反応が増え、「ほとんどない」への反応は、3歳の時点から割合としては低かったものの確実に減少しており、子どもが園での集団活動になじみながら交友関係を発展させていく様子がよくうかがえる。

前述の4段階を念頭に置きながら小項目を見てみると、①に相当する「他の子どもの方に近づきだけ、そばに立つだけ」とか「子どもたちのグループの外にいる」、「他の子どもの遊びをじっと見ている」という項目や、②に相当する「他の子にさわったり、押したりする」という項目では、園の評価でも親の評価でも、子どもの年齢と共に「ほとんどない」が増加し、③に相当する「他の子どもに声をかけたり話をする」や「他の子どもに何かを見せる」の項目では、なぜか親の評価では発達的な変化が見られてないが、園の評価では「いつも」が明確な増加傾向を示している。この他、「他の子どもとよく遊ぶ」とか「特別に親しい友だちがいる」の項目では、園でも親でも、子どもの年齢とともに「いつも」が増加し、「ほとんどない」が減少するという傾向をはっきりと示し、接触(社交性)領域における質的な発達をよく物語っている。

対子ども関係を見た場合、親の評価よりも園での評価の方が、よりスムーズな発達が示されているようである。ただ、対大人関係においても対子ども関係においても、③の段階が園での評価では

子どもに対する接触(園)



子どもに対する接触(親)

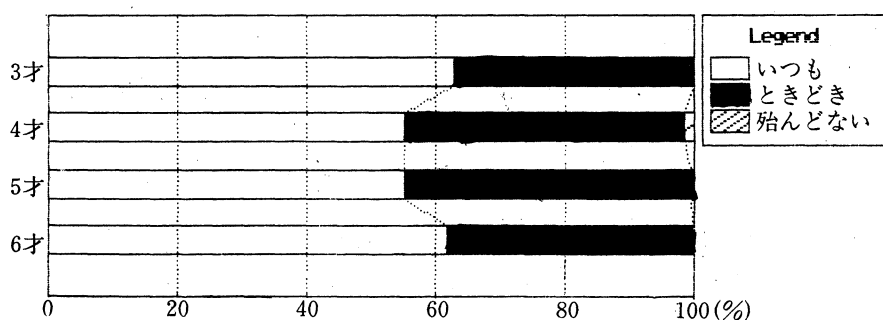


図-2 子どもに対する接触

子どもの年齢の上昇につれて増加しているのに対して、親の評価では停滞ないしは減少している点が気になる。②の段階での行動はさわったり、押したり、派手な言動をとったりするので、現象的には目につきやすいが、③は一般に安定し落ちついた行為である事が多いため、観察や評価の不慣れた親には見過ごされがちであったり、あるいはその価値が過小評価されがちになる事も理由の一つとして考えられるかも知れない。

2. 依存(利用)

(1) 対大人関係

大項目への反応で、大人に対する子どもの依存的態度の全般的な傾向をみてみると、園における保育や教師の評価と園以外での親の評価には、かなりの差がある。図-3をみると、「いつも」という反応では園と親の間にはほとんど差がないが、「殆んどない」という反応は園の方が親よりも高く、年齢とともにこの差は広がっている。つまり、保育や教師は親よりも高い比率で、子どもの大人に対する依存的な態度を否定しているのである。

これには2通りの解釈が考えられる。まず第1には、子どもの態度が園の中と外で実際に異なっており、公的な場面である園では自律的に、私的な場面である家を中心とした生活空間ではより依存的に行動しているという解釈である。第2は、保育・教師の評価基準が親のそれと異なっており、前者は年齢層の異なった大勢の子どもを比較の対象とし得るために客観的で確かな評価が可能であるが、一方そういったしっかりした比較基準をもたない後者は主観的で近視眼的な評価しかできない

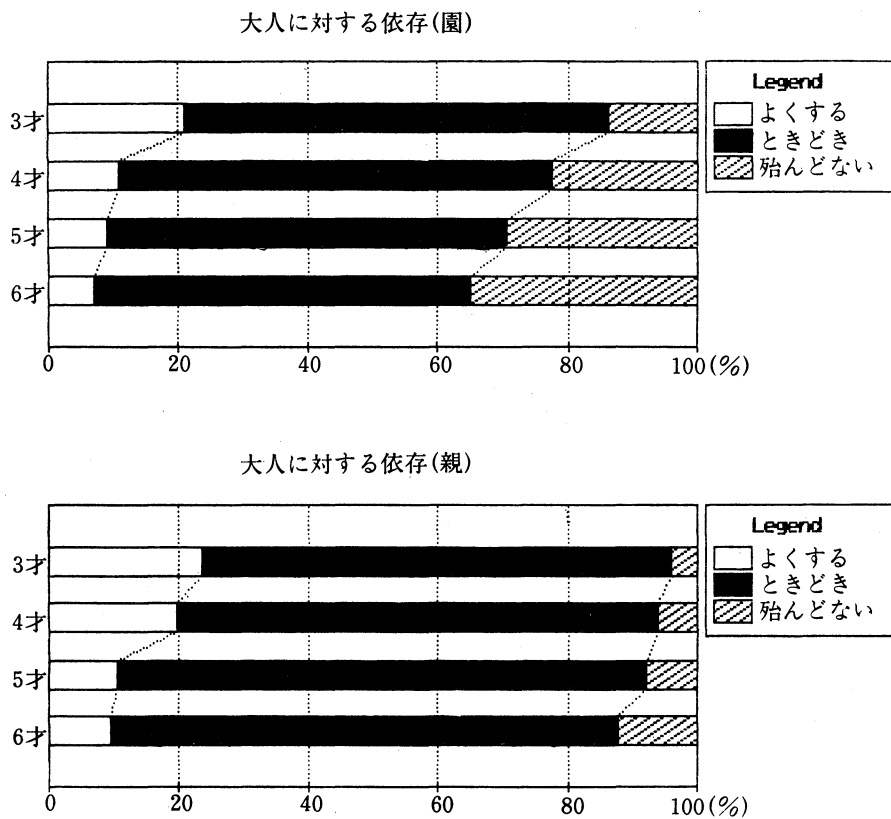


図-3 大人に対する依存

いために生じた差であるという解釈である。

図-3に示された反応からだけでは、どちらの解釈が正しいかを判断するのは困難だが、後に述べる、対子ども関係の大項目(図-5)や、その他の小項目の結果と比較してみると、ある程度の推測が可能である。つまり、他の子どもに対するその子の依存的行動の評価では、園と親の間には大きな差は見られない。このことからすると、図-3の評価のズレは、評価者に起因するよりも子どもの実際の行動の差に起因する部分が多いことが示唆される。

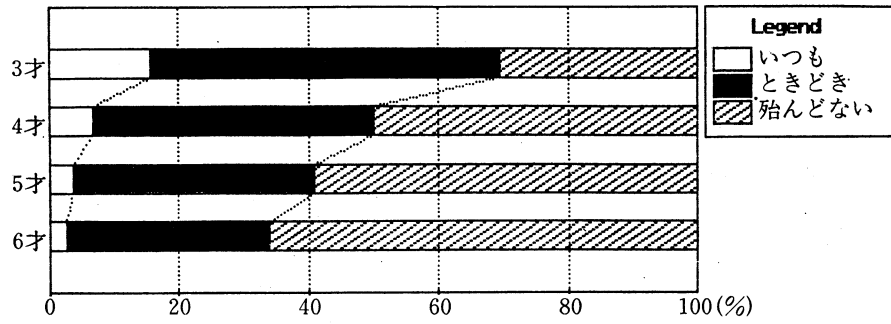
対大人関係の具体的な小項目においても、ほとんどが大項目と同じ傾向を示し、親の評価よりも園の評価において子どもの依存的態度は低く現われ、しかもその差は子どもの年齢の上昇とともに大きくなる。その典型的な例として、「大人に甘えてなぐさめてもらう」という項目についての園と親の評価を図-4に示すが、この項目では園と親の評価の一致係数は0.44、サイン検定の結果、親よりも園の方が子どもを依存的でないと評価する傾向が有意($CR=23.92, P<0.01$)に高いことがわかった。子どもは、園での大人(保母・教師)関係では園以外での(主として家での)甘えや依存を随分と抑制している姿がよく現われていると思われる。

(2) 対子ども関係

他の子どもに対する依存傾向は、大人に対する依存傾向ほど園と親の評価に差がみられない。まず、全般的な傾向を大項目の結果からみてみると図-5のようになっている。

少し前に述べたように、この項目に対する評価では、園と親の間にほとんど差がみられない。ま

大人にあまえて、なぐさめてもらう(園)



大人にあまえて、なぐさめてもらう(親)

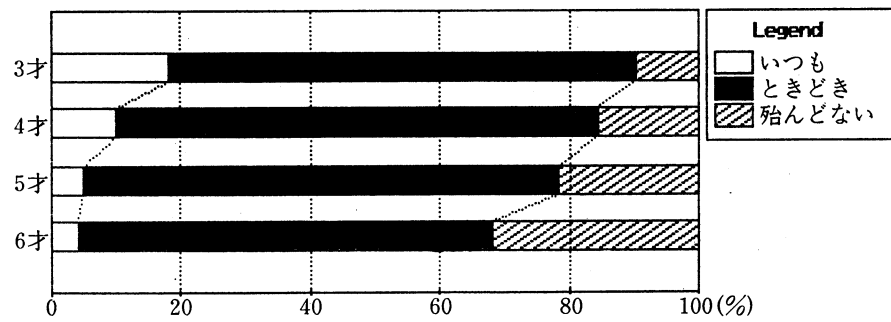
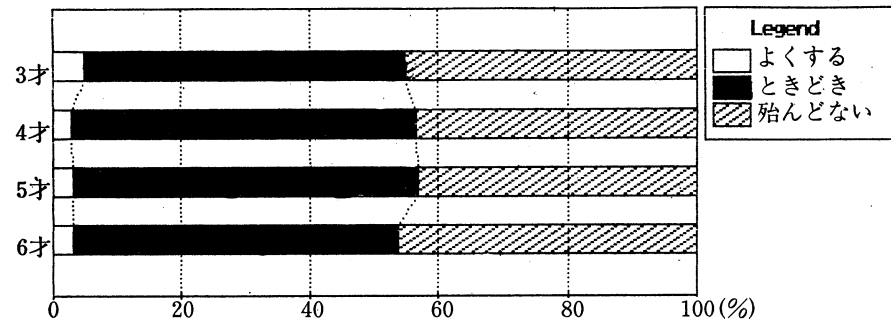


図-4 大人に甘えてなぐさめてもらう

子どもに対する依存(園)



子どもに対する依存(親)

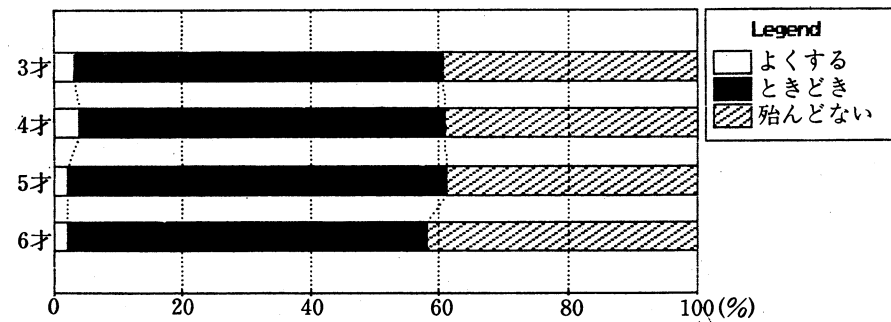
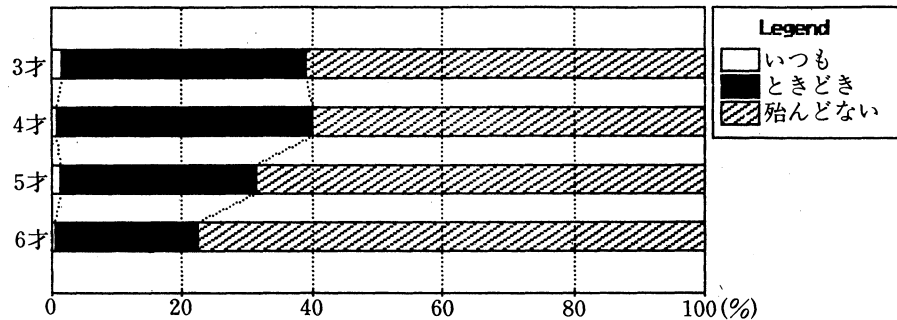


図-5 子どもに対する依存

他の子に道具の扱いを手伝ってもらう(園)



他の子に道具の扱いを手伝ってもらう(親)

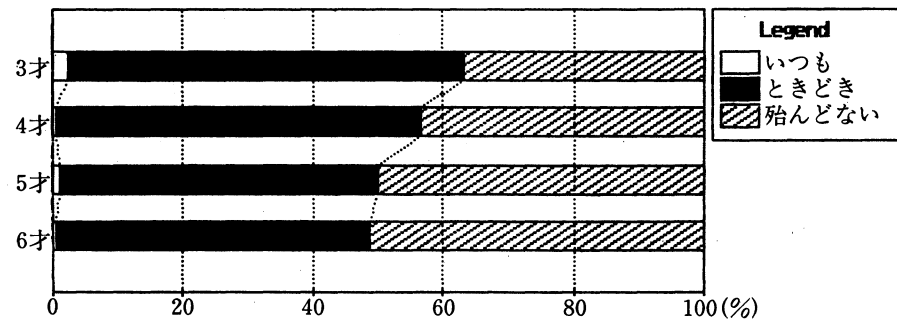


図-6 他の子に道具、遊具の扱いを手伝ってもらう

た、この項目では、園の評価においても親の評価においても発達的な変化がまったく現われていないが、これも珍しい特徴である。

具体的な小項目においても、だいたい同じような傾向が認められる。そんな中で、「他の子に道具、遊具の扱いを手伝ってもらう」という項目では、園と親の評価の間にはっきりとした差が見られる(図-6)。これは恐らく、園での子どもの活動場面では、親の目に触れる活動場面におけるよりも道具や遊具を用いる機会が多く、また、その際に周囲の者が手を貸してやるのではなく、自分で対処するような指導や雰囲気を作られているためであろう。

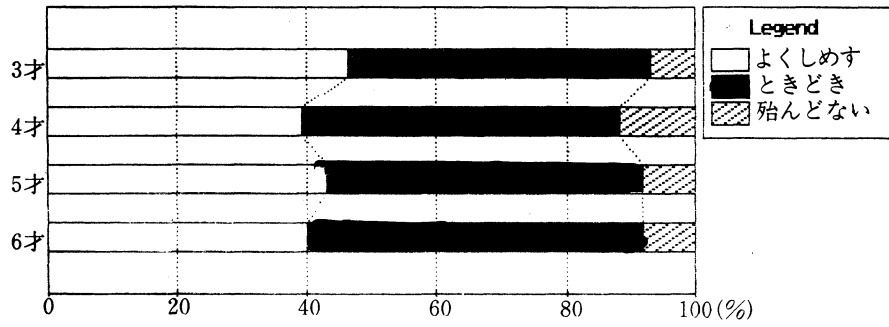
3. 愛情((同情・好意・親切))

(1) 対大人関係

図-7は対大人関係における愛情的態度の全般的傾向を示した大項目の結果であるが、園と親の評価では随分と大きな差が現われている。園と親との判断の一致係数は0.495で、2,982人の園児に対して園の保育・教師と親とが同じ段階の評価をしたケースが1,477あったが、残りの1,505ケースのうち、大人に対する子どもの愛情的行為や態度を親の評価よりも園の保育・教師が低く評価したのが1,245ケースであり、園の方が親よりもはっきりと厳しい評価をしている(サイン検定 $CR=25.36$, $P<0.01$)。

具体的な小項目においても、上述の大項目とほぼ同じような結果が得られている。ただ、園での評価では、子どもの年齢の上昇とともに愛情的態度も徐々に増加する傾向が見られるのに対して、

大人に対する愛情(園)



大人に対する愛情(親)

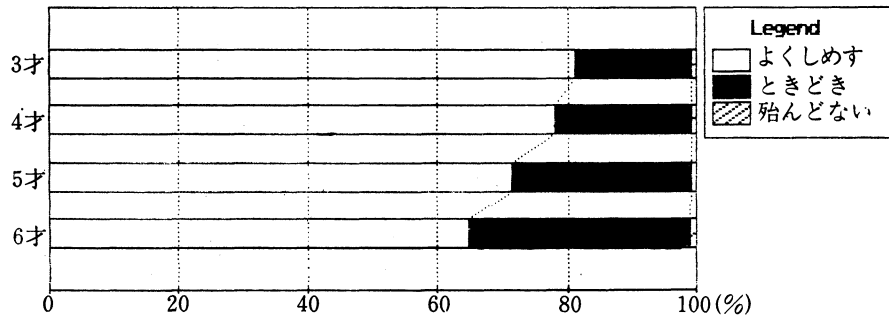
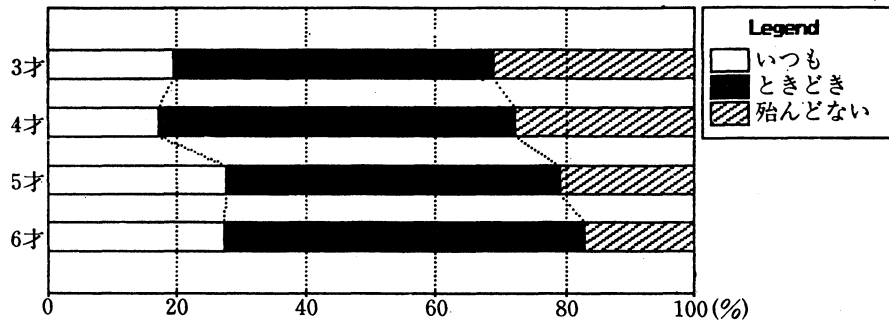


図-7 大人に対する愛情

大人が困っていると同情する(園)



大人が困っていると同情する(親)

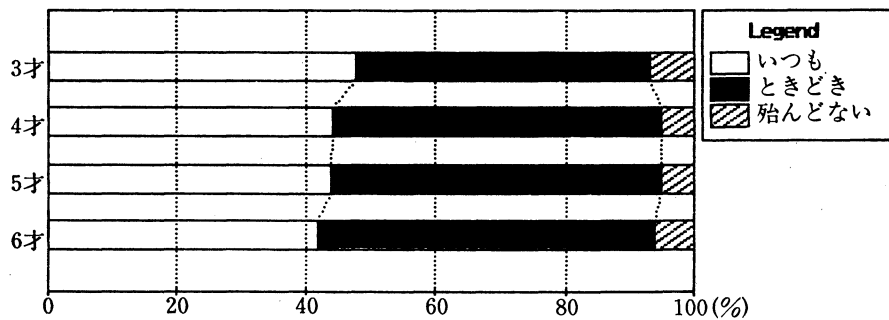


図-8 大人が困っていると同情する

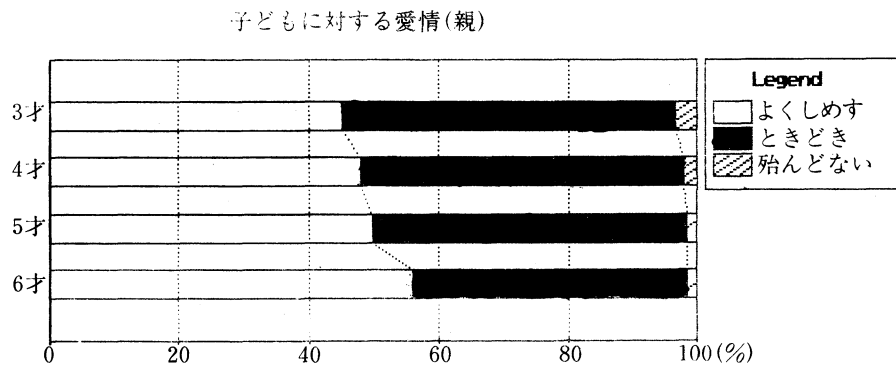
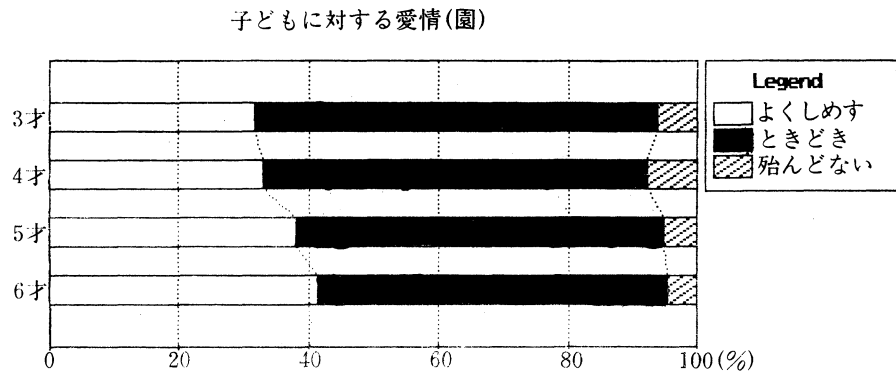


図-9 子どもに対する愛情

親の評価では、逆にはっきりと下降している。例えば、「大人が困っていると同情する」(図-8)を見てみると、3・4歳では園と親の評価には大きな違いがあったものが、5歳・6歳になると随分とその差が縮まり、親に対しても保育士・教師に対しても同じような態度を取るようになってくる事がうかがえる。

またこの点は、次に述べる対子ども関係での結果と比較してみても興味深い。他の子どもに対する愛情的態度は、園の評価でも親の評価でも、年齢の上昇とともに増加しているのである(例えば図-9)。これは、幼児の関心や愛情の対象が大人、特に親から他の子どもへと拡大していくことを反映したものであろう。親の評価による「大人に対する愛情」の目減り分が、「子どもに対する愛情」の増加に関係しているようである。

(2) 対子ども関係

図-9は大項目の結果を示したものであるが、上でも少し触れたように、対大人関係(図-7)の場合とは非常に様相を異にしている。ここでは園での評価と親の評価がだいたい同じような傾向を示しており、そこにははっきりとした発達的な変化が見てとれる。

小項目でも、そのほとんどが大項目と類似した反応パターンを示している。つまり、園での評価と親の評価にあまり差がなく、どの項目でも子どもの年齢に伴う発達的な変化が顕著に現われている。そんななかで、両者の評価に比較的大きな差が見られたものとして、「他の子どもに物を分けてやる。(お菓子や玩具など)」、「新入りの子どもを引っぱって仲間に入れてやる」、「生き物をかわ

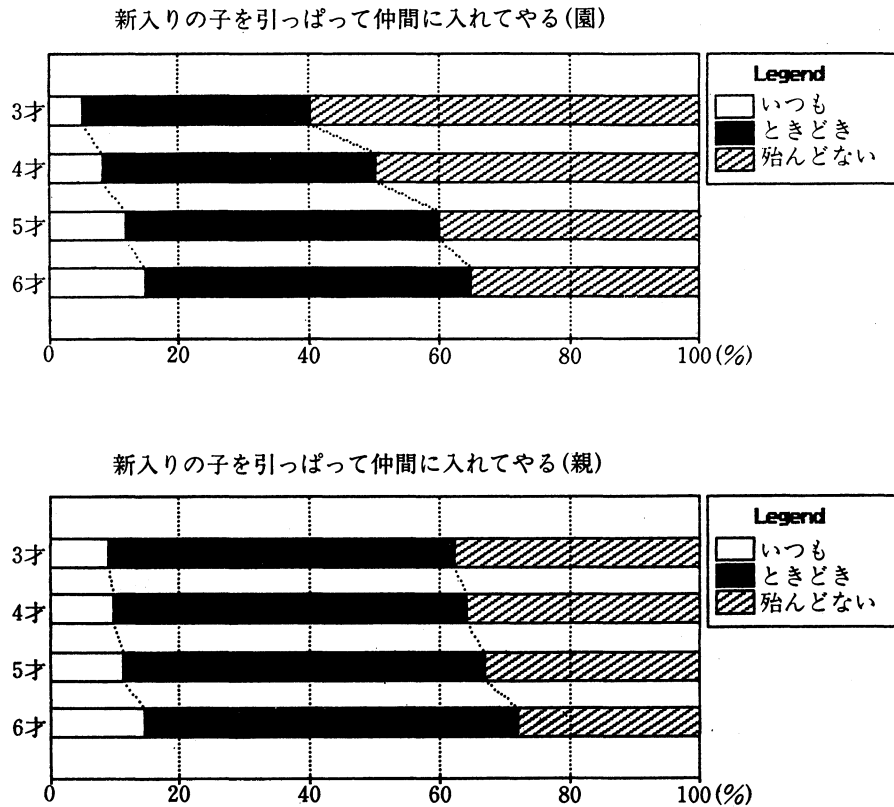


図-10 新入りの子どもを引っぱって仲間に入れてやる

いがる」といった項目があるが、最初の「物（お菓子や玩具など）を分けてやる」については、園の生活ではそのような行為があまり許されていないための差であろう。また、2番目の項目（図-10）では、3歳の時点では相当に開いていた差が4歳、5歳と年齢が増すにつれて縮まり、6歳の時点ではほとんど同じ評価水準に達している。

この愛情領域に関しては、他の領域と比べて、対大人関係と対子ども関係の間でかなり明確な差が認められたし、また、子どもの年齢による発達的变化もはっきりした形で現われた。

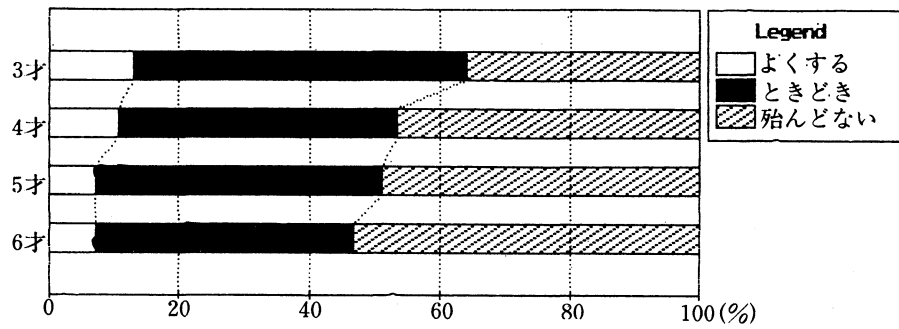
4. 支配（指導・命令）

(1) 対大人関係

大項目の結果を図-11に示しているが、園での評価でも親の評価でも発達的变化という点では類似したパターンを見せているものの、両者の間には相当に大きな数値的な開き（どの年齢段階でも15%~20%）がある。園児に対する園と親の評価の一致度を表わす一致係数は0.43であるが、ズレの大きさを表わすサイン検定では $CR=22.23$ ($p<0.01$) と大変大きい。

支配領域における親の評価の対象は、その大部分が恐らく家庭内での子どもの行動なり態度であったらうと予想される。そうすると、最も私的で自由な行為、あるいは自己中心的な言動が許容される家庭と、公的で集団活動の統制が計られている園とでは、前者においてより強い自己主張が現われるのは当然であろう。その意味では、大項目においても、また「大人にいいつける。（一緒に来て！ あれをやって！ 等）」、「大人をしかる。大人に、だめ！ などと批判する」といった小

大人に対する支配(園)



大人に対する支配(親)

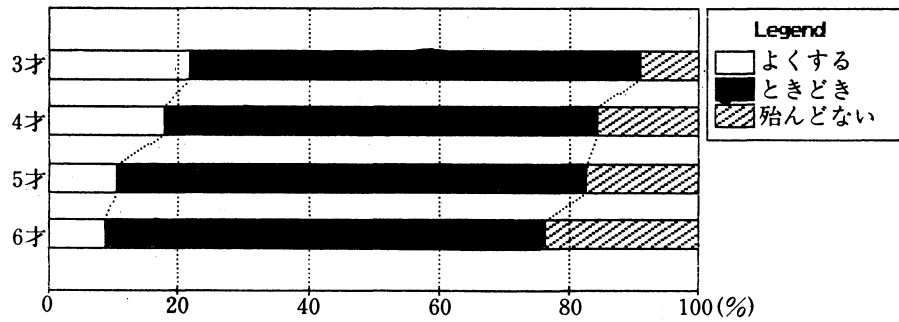
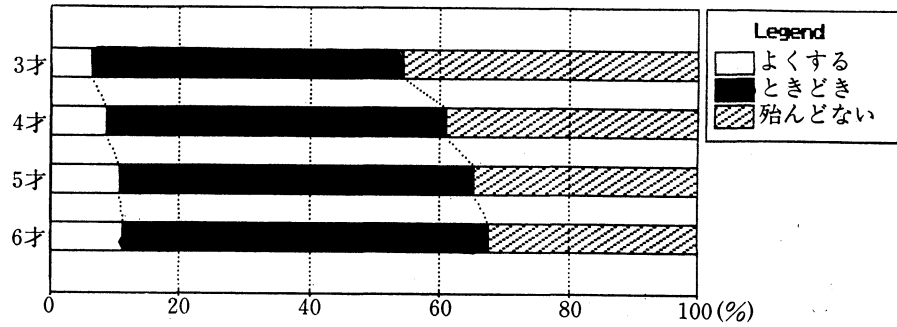


図-11 大人に対する支配

子どもに対する支配(園)



子どもに対する支配(親)

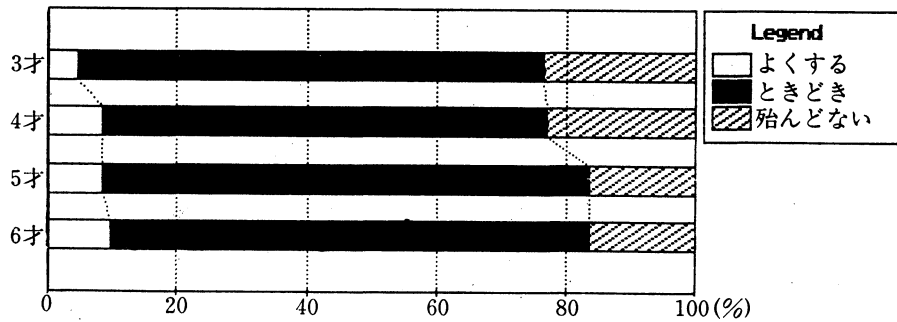


図-12 子どもに対する支配

項目においても、親の方がはるかに高い割合で子どもの大人に対する支配的態度を認めているというのは至極当然な結果ともいえる。ただ、園での評価でも親の評価でも、子どもは年齢の上昇につれて、大人に対して支配的でなくなる傾向がはっきりと現われているのは、まさに子どもが社会化されていく姿を示しているのであろう。

(2) 対子ども関係

図-12は対子ども関係の大項目の結果であるが、対大人関係(図-11)と比較した場合、園と親の評価の差はずっと少ない。この領域の対子ども関係の小項目は7個あるが、そのいずれも大項目と同じような傾向を示している。対大人関係における園と親の評価の平均一致係数が0.43であるのに対して、対子ども関係での平均一致係数は0.52であることから評価の差の少ないことがわかる。

一般に、どの項目でも親の方が子どもを支配的だと評価しているが、反応内容を検討してみると、「いつも」への反応率では差がなく、残り2つへの反応率の差、つまり、園では「ほとんどない」が多く、親では「ときどき」が多いところから差が生じている。

対大人関係の場合に比べて、対子ども関係で園と親の評価の差が小さかったという事は、子ども対子どもの場合には相手や場所の違いによる影響はあまり大きくないが、子ども対大人の場合には大きな影響を受けるという事であろう。

5. 従順(協調)

大坪らの論文(前出)の末尾に付してある資料の従順領域のサイン検定の所を見ると、これまでの4領域では大半の項目が+ (プラス) 方向になっていたのに対して、この従順の領域では統計的に有意差のあった項目では全て- (マイナス) 方向になっており、それも特に、対大人関係で顕著な形で現われている。これは、子どもが園以外での大人関係においては従順さが欠如しており、園でのそれとの差が著しい事を意味している。

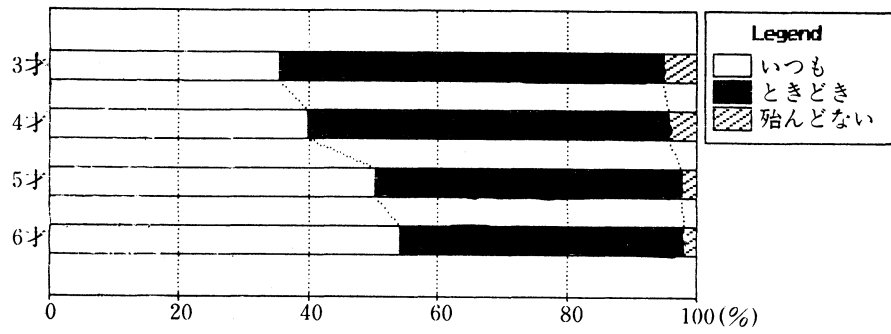
(1) 対大人関係

次の図-13は、対大人関係についての大項目の結果である。どの年齢層においても、園での評価と親の評価との差は相当に大きい、「ほとんどない」への反応率では両者の差は極めて小さく、また、子どもの年齢の上昇に伴って、両者とも子どもの服従傾向が増大すると評価している。この点については、3つの小項目すべてについて共通に言える。園での活動において、子どもが「保母・教師の言うことに服従し」、「協調的であり」、「素直である」というのは、園以外での活動場面との比較で言えば自然に肯定できるところである。

(2) 対子ども関係

対子ども関係では、大項目においても(図-14)、小項目においても、園での評価と親の評価との差はほとんどない。強いて言えば「いつも」への反応が園においてやや強いといった程度である。しかし、大人と子どもに対する態度の違いをみると、親の評価では両者の間にあまり差がないのに対して、園の評価では相当に大きな差のあることがわかる。つまり、子どもは保母・教師に対してのみ特別な態度で接しているともえよう。

大人に対する従順(園)



大人に対する従順(親)

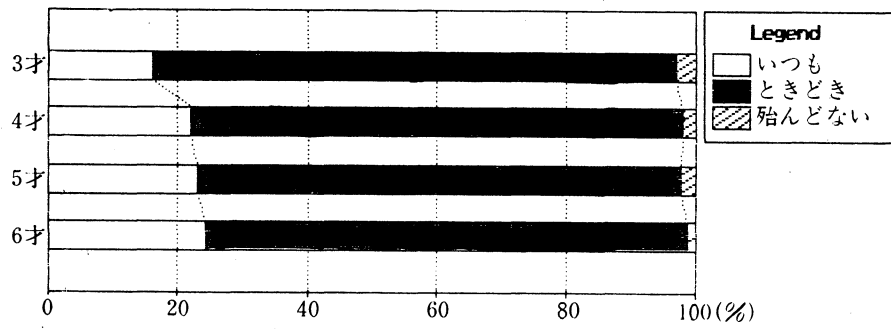
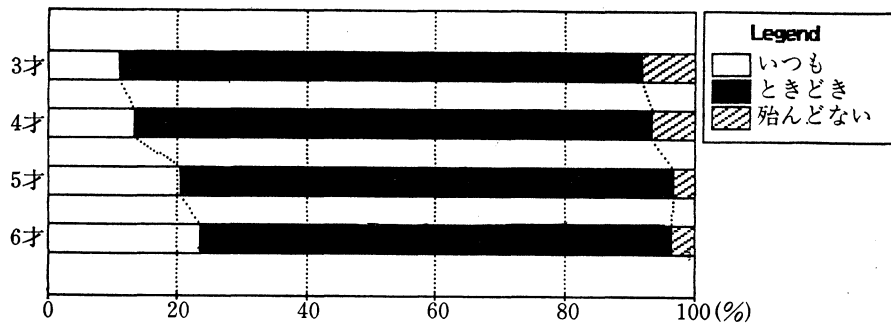


図-13 大人に対する従順

子どもに対する従順(園)



子どもに対する従順(親)

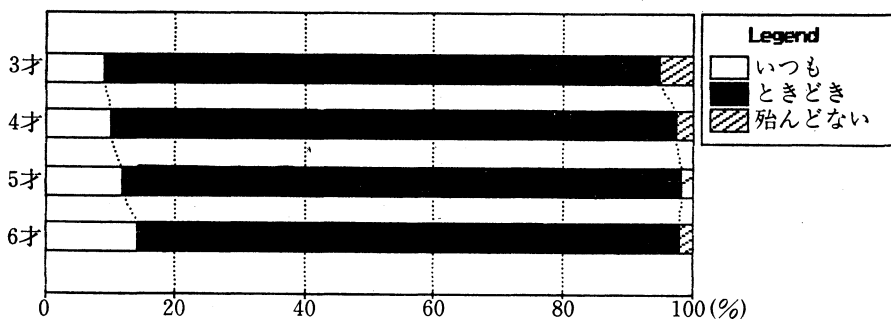


図-14 子どもに対する従順

6. 拒否（抵抗・敵意・からかい）

自我の発達に伴って、子どもは周囲の大人や子どもに対して口答えしたり、無視、拒否、悪態、喧嘩、などの態度をとってトラブルを起こしたり、次にとりあげる問題である競争精神を旺盛に働かせることによって、相手から承認されたい、相手に凌駕したいという欲求をもつようになる。

しかし幼児前期でのこうしたトラブルの多くは、はっきりと相手を意識してなされるものではなく、自己中心的な傾向のために相手の存在を無視したり、遊びの邪魔をすることから始まる。それが幼児後期になり集団遊びが行なわれるようになるにつれて、遊びの中での要求や意見の対立、あるいは身体的攻撃が喧嘩の原因となりやすくなる。グリーン（Green, E. 1933）は幼児の自由遊び場面を観察し、相互に友好的である者どうしで喧嘩が多く、逆に喧嘩する者どうしは同時に普通以上に友好的であることを明らかにして、喧嘩は幼児にとっては友好的な社会的交渉の一部であると述べている。

このように、幼児は周囲の壁にぶつかりトラブルを起こすことによって社会性や仲間意識を育てていくのである。喧嘩をすることによって、相手に受け入れられるような適切な感情や要求の表現の仕方などを学習する。したがって、保育者にとっては、幼児の喧嘩やトラブルは非社会的行動ではなく、むしろ社会性や対人関係を育てるよい機会であるといった認識が肝要かと思われる。

(1) 対大人関係

図-15は大項目の結果であるが、園での評価と親の評価では「ほとんどない」への反応率で随分大きな開きがある。ここでの一致係数、つまり、三段階評定で園と親の評価が一致した割合0.43（1286/2980）で相当に低く、逆に両者の評価のズレは、園での評価が子どもの拒否傾向を否定する方向で顕著に現われている（1694例中、1507例で園が子どもの拒否的態度を親よりも低く評価している。逆方向での評価は1694例中、僅か189例にすぎない）。

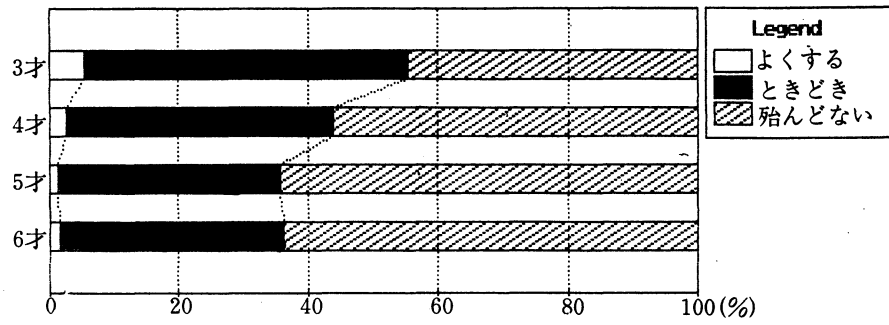
対大人関係の小項目は5個あるが、傾向としては大項目と大体同じである。つまり、拒否的態度を否定する反応が園で強く現われるが、いずれの項目でも「いつも」への反応率は極めて低く（ほとんどが5%以下）、また「ときどき」への反応も、子どもの年齢の上昇につれて下降し、「ほとんどない」への反応が着実に増加している。たとえばその一例として「大人の言いつけに口答えして、やらない」という項目に対する反応結果を図-16に示すが、園と親との評価の差は、「ときどき」と「ほとんどない」への反応率の違いから生じている。「ほとんどない」への反応率をみると、どの年齢群においても園の方が親よりも30~40%近く高い割合を示している。

このことは、子どもは既に3歳の時点から、私的な日常生活場面における親やなじみのある大人に対しては、ある程度自我を主張した拒否も許されるが、公的な園での大人関係ではそれがあまり許されないのだという事を自覚し、そのように行動している事、あるいはそのような行動が可能である事を示唆している。

(2) 対子ども関係

大項目での結果が図-17である。対大人関係での図15と比べてみると、その違いは一目瞭然であ

大人に対する拒否(園)



大人に対する拒否(親)

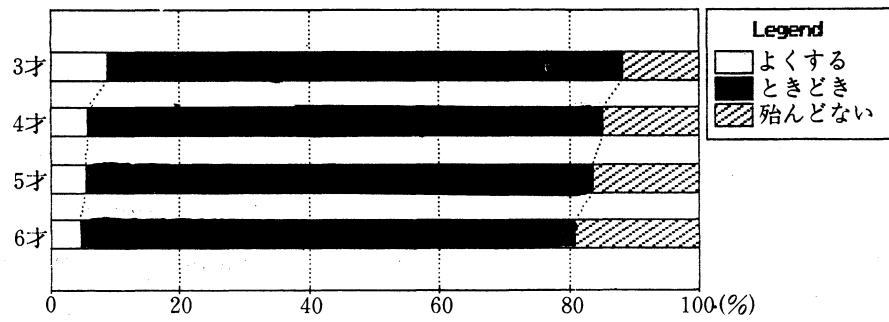
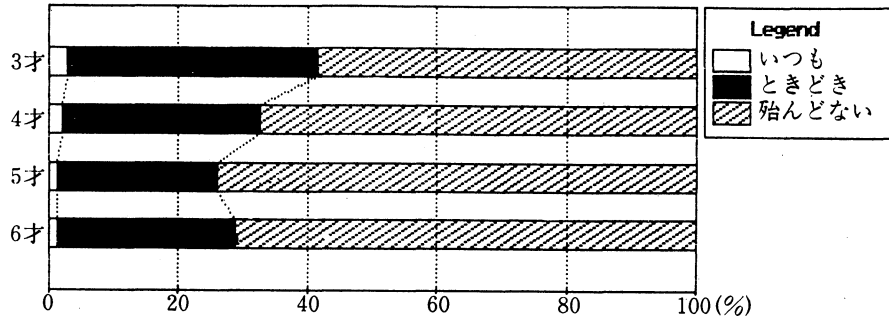


図-15 大人に対する拒否

大人の言いつけに口答えして、やらない(園)



大人の言いつけに口答えして、やらない(親)

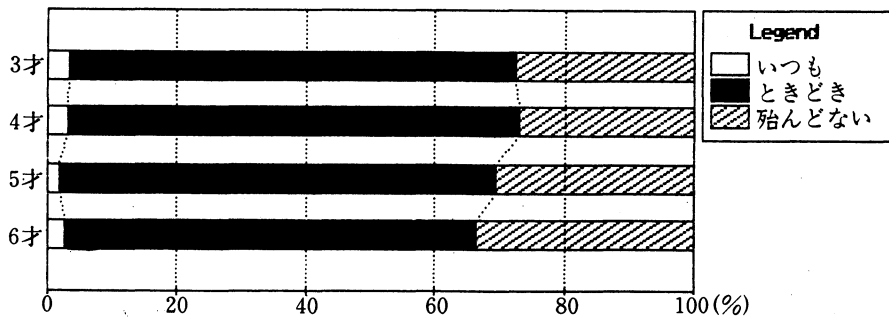


図-16 大人の言いつけに口答えして、やらない

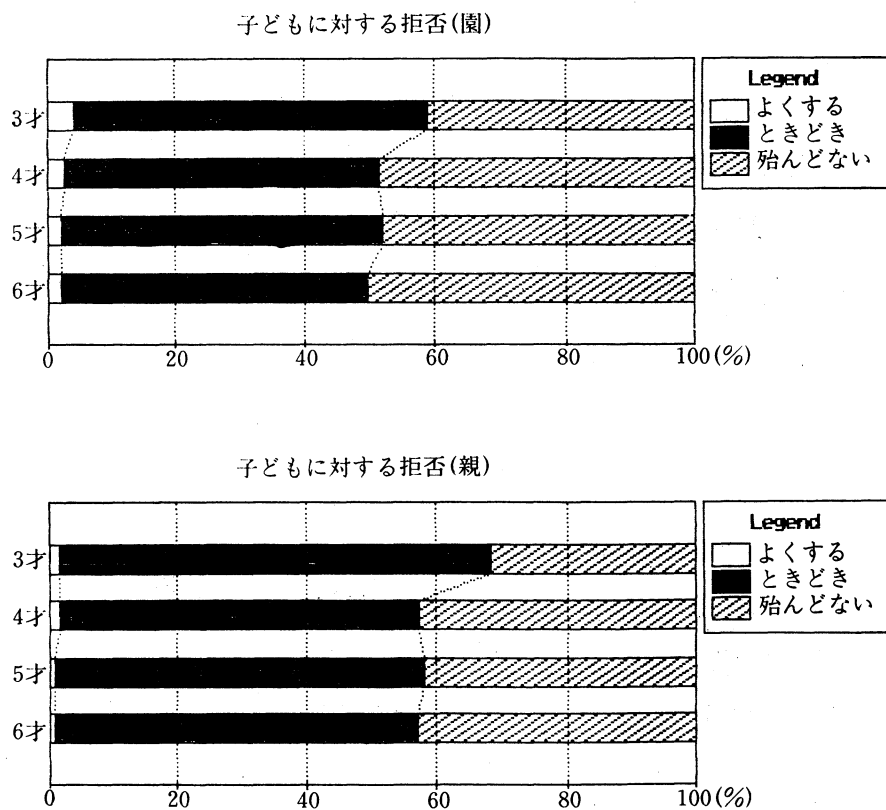


図-17 子どもに対する拒否

る。他の子どもに対する拒否的態度や行動が「ほとんどない」という回答が、園でも親でも50%前後を占め、三段階の評価での一致率も0.54と相当に高い。逆に評価のズレをみると、大坪らの論文(前出)の末尾資料のサイン検定の結果では $CR=4.85(+)$, $P<0.01$, とズレの方向で統計的な有意差がでていますが, $[+(プラス)方向でのズレの数]:[-(マイナス)方向でのズレの数] = 779 : 598$ と, それ程大きな差でもない。

対子ども関係での小項目は10個設けてあるが, その中にはいくつかの特徴ある結果も含まれている。園と親との評価のズレの大きさはサイン検定のCR値で示しているが, 大坪らの論文(前出)の末尾の資料をみてみると, この拒否領域では前述の従順領域と同様に, 対大人関係と対子ども関係のCR値に, 対大人関係で大きく対子ども関係で小さいという方向で大きな差のある事が一つの特徴であるが, その対子ども関係の中でも「他の子の言う事を無視する」と「他の子をからかう」という項目では特に小さな値が得られている。

また, いくつかの例外を除けば, 子どもが他の子に対してとる拒否的な態度や行為は, 3歳ないし4歳を境にして大きく改善され, 発達的な向上が現われることが示されている。

また, 他とは発達的に逆のパターンを示す項目も見られる。ほとんどの項目では, 子どもの年齢の上昇に伴ってそういった行動が見られなくなるという方向を示しているが, 「他の子をからかう」という行為は年齢と共に増加している(図-18)。「悪態をつく」とか「いじめる」, 「けんかをする」といった抵抗・敵意のより直接的な表現は, 子どもの年齢の上昇とともに親や保母・教師などの社

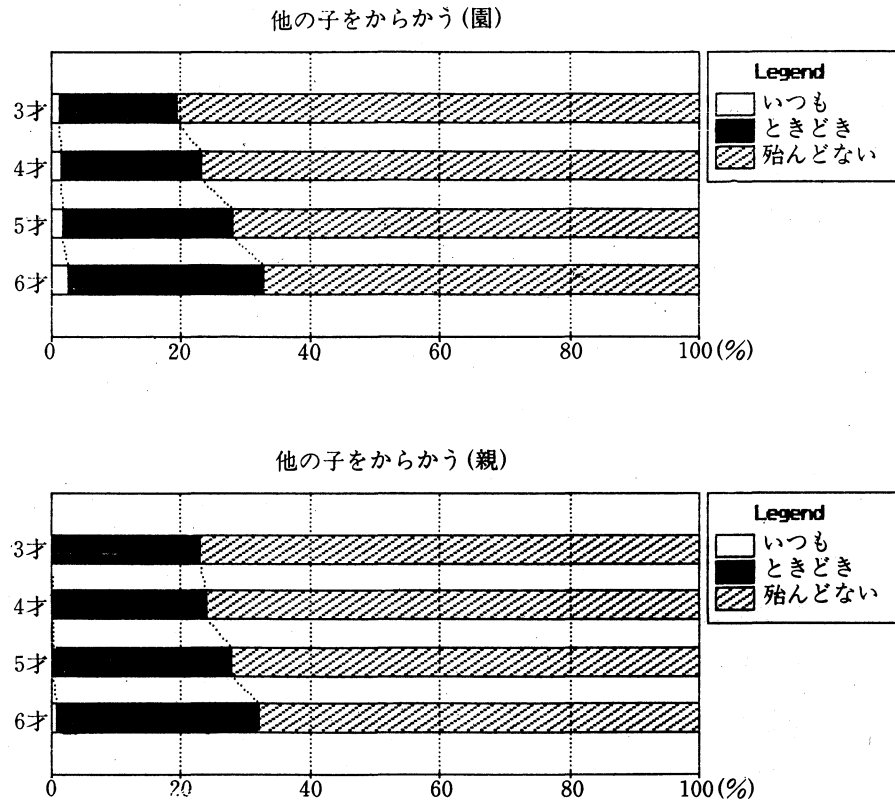


図-18 他の子をからかう

会化の担い手から厳しく制止されるので徐々に減少するが、「からかう」という行為はより間接的であるために制止の程度もその分だけ緩く、また他の行為と比較すると、そこには知的要素も多く含まれてくるようになるのでこのような結果になったのであろうと思われる。

7. 競争(自慢)

競争は、他人に対して優越感をもちたい、あるいは勝利感を味わいたいといった要求に基づいた社会的行動である。この競争心理は社会的行動の中では、「2歳児では競争は未だみられないといわれるが、3～4歳頃になると他人よりも自分が優れていることを示したがるようになる。そして4歳過ぎには明らかに他人に勝ちたいという要求が現われ、5～6歳児では75%以上のものが強い競争意識をもつようになる。」(島田, 1980) といった現われ方をし、幼児の心身の発達に伴い個人的なものから集団的なものへ発展していく。したがって、幼児が集団活動をしていくためには、競争とともに、前述した協調・協同的行動の発達が必要である。

(1) 対大人関係

図-19は大項目の結果であるが、親の評価において「いつも」、「ときどき」が多く、園での評価において「ほとんどない」が多くなる傾向を示している ($CR=13.35(+)$, $P<0.01$)。

こういった傾向は3つの小項目ではさらに顕著に現われている。「大人とよく競争し、又は大人に自慢する」とか「自分のした事を大人にみてもらいたがる」、「大人に自分のことを得意に話す(したこと、作った物など)」では、いずれもプラス方向で高いCR値を示しており、子どものそう

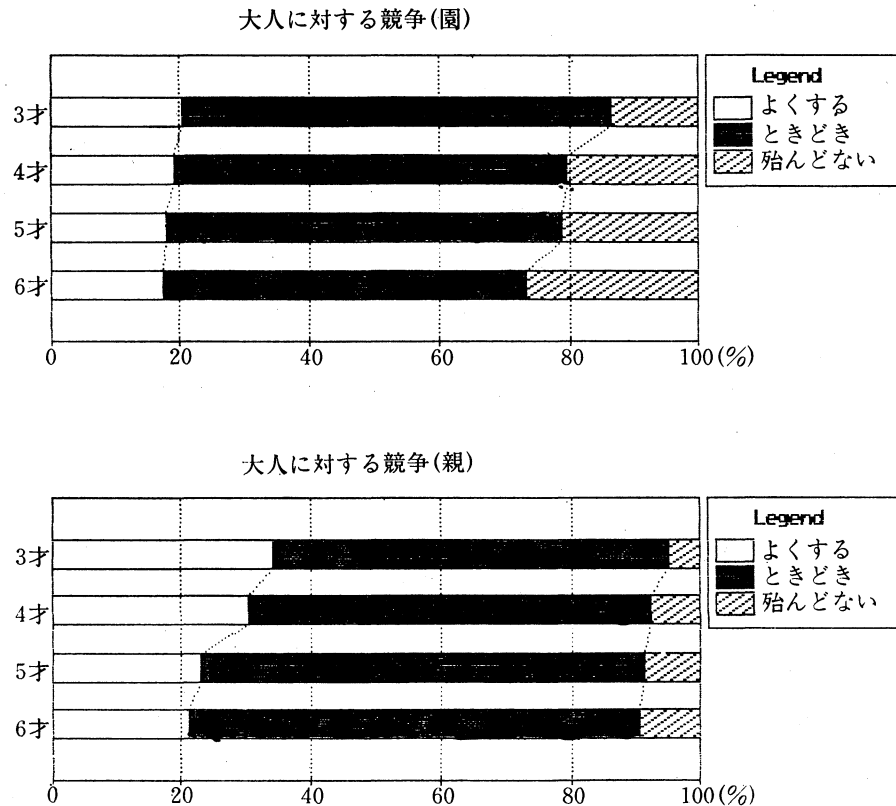


図-19 大人に対する競争

いった行動が親の目に比べて、保育・教師の目には随分少な目には映っていないことを物語っている。これにはいくつかの理由があるだろうが、公的な園での活動場面では過度な競争心や自己主張は抑制されがちであるのに対して、家庭などの私的な場面では抑制よりもむしろ歓迎される場合もあるなどの、両場面における雰囲気の違いに子どもが反応し分けている事、あるいはまた、競争心の旺盛な子であってほしいという親の願望が評価のあまさとって現われやすい事などもその理由として考えられるであろう。しかし、これはあくまでも推測の域を出ない。

(2) 対子ども関係

対大人関係と比べると両者の評価の差は小さいが、発達差に関しては特徴的な結果がいくつか見られる。園の評価では大項目のほか4つの小項目のうちの2つで発達差が見られていないが、親の評価では大項目以外はすべて発達差が見られる。典型的なものとして「他の子と大人の注意をひくことではありあう」(図-20)の項目では、発達差が園では見られず親でのみ現われている。5~6歳の時点では園と親の評価は一致していることから考えると、園で発達差が見られなかったのは、園では子どもが既に3歳の頃から自分の行動を抑制し、園の内と外とで行動を使い分けていたという解釈も成り立つ。

一方、園でも親の評価でも顕著な発達差が見られるものとして、「他の子と持ち物、遊具、場所とりではありあう」(図-21)、「自分がまけると泣く」があるが、特に前者は、先に述べた従順(協調)の発達(対子ども関係)と対比させて考えてみると面白い。例えば「相手のやることに応じて

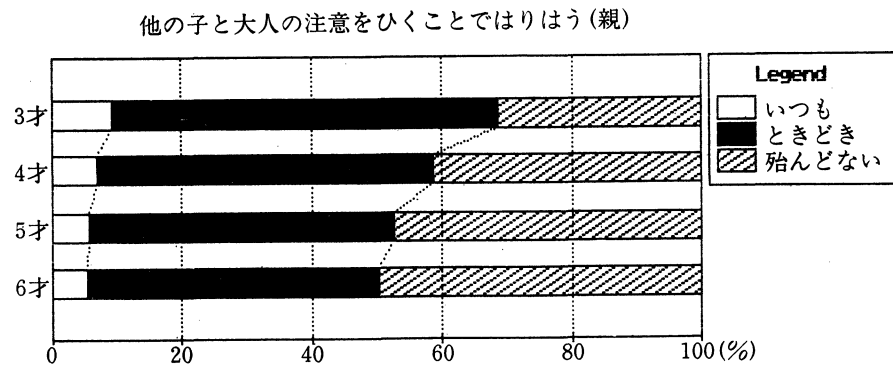
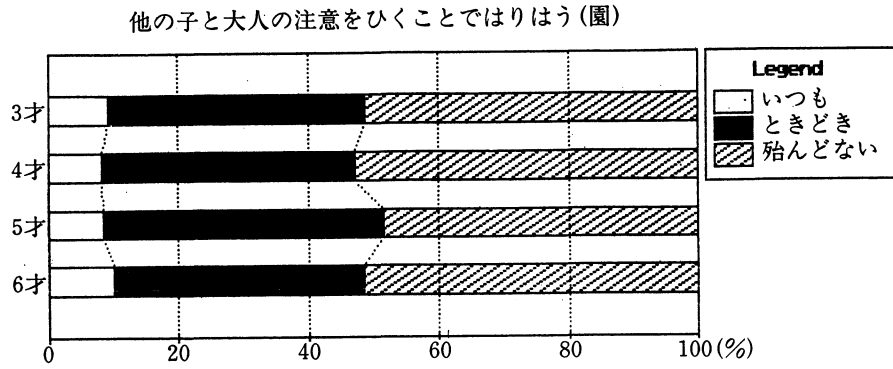


図-20 他の子と大人の注意をひくことではりあう

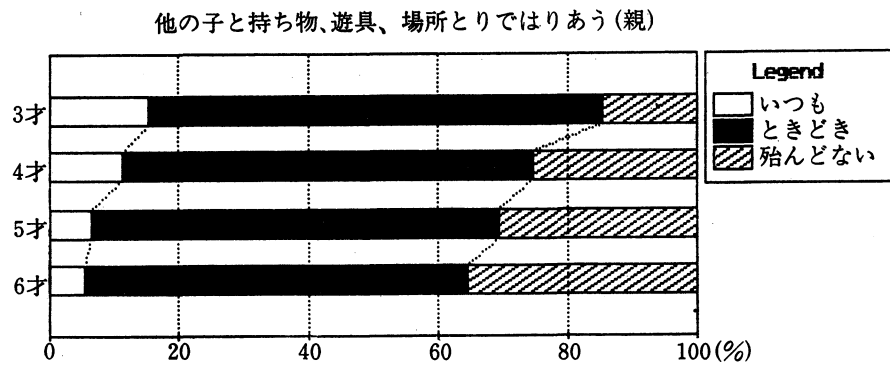
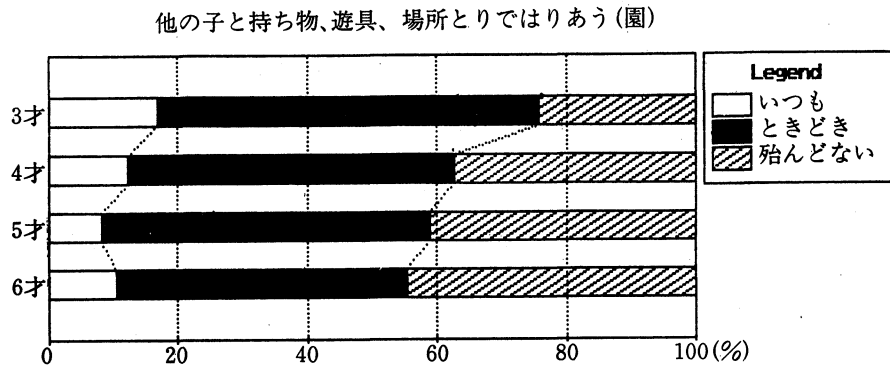


図-21 他の子と持ち物、遊具、場所とりではりあう

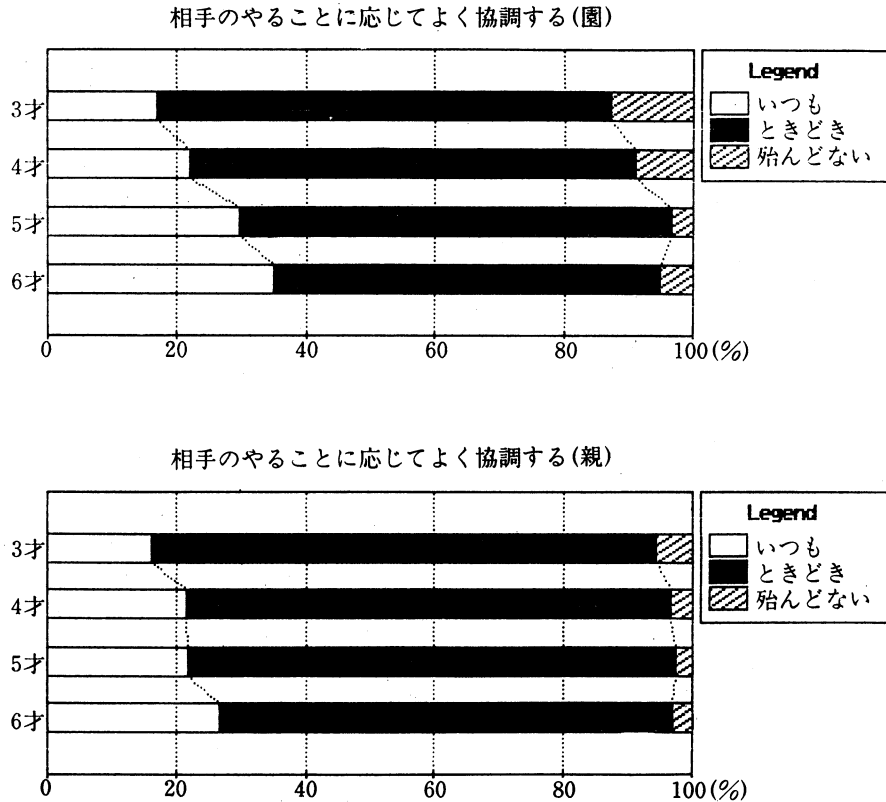


図-22 相手のやることに応じてよく協調する

よく協調する 図-22)の結果と比較してみると、協調性の発達に応じて競争的なはりあいが減少している様子がよくわかる。

8. 模倣

子どもが言葉の獲得をはじめ多くの社会的行動を、模倣によって獲得していることは否定しえない事実である。それも意図的な模倣よりも非意図的な模倣の役割が大きいと言われているが、この模倣行動もモデルと模倣者の間に成立する社会的行動である。したがって、模倣行動の生起しやすい対人関係という側面が当然問題になるが、一般的には、子どもの生活環境の中でその活動に支持とコントロールを与える中心的人物(たとえば、両親、教師、遊び仲間)とか、好意的な感情を抱いている相手などが影響力のあるモデルであると言われている。

(1) 対大人関係

大項目の結果を図-23に示す。園での評価よりも親の評価において子どもの模倣行動は多く現われており、この傾向は5つの小項目でも共通している。また、どの項目においても模倣行動は、子どもの年齢の上昇とともに園の評価でも親の評価でも減少するが、親の評価における方が、よりはっきりとその傾向が感じられる。

(2) 対子ども関係

大項目でも小項目でも、殆んどが対大人関係と同じような結果を示している。つまり、子どもの模倣行動は親の評価において多く現われるが、両者の評価とも子どもの年齢の上昇とともに減少す

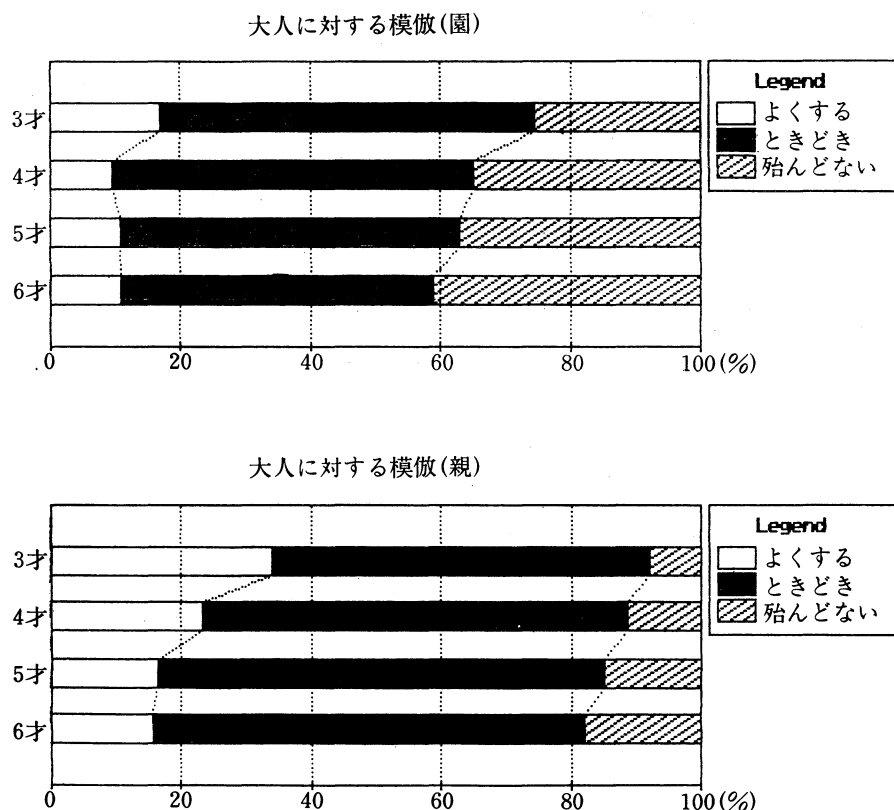


図-23 大人に対する模倣

る傾向を示している。

9-1. 責任を負う(規則を守る)

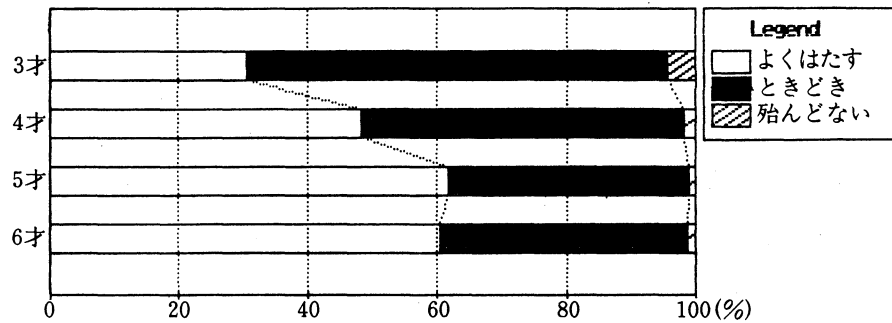
この領域と最後の領域では、大人と子どもを含んだ形での対人関係を問うているので、結果もそのような形で考察する。

この領域は1つの大項目と12の小項目から成るが、どの項目に関しても責任を負ったり規則を守ったりする子どもの行動は、親の評価よりも園での評価に多く現われている。しかし、いずれの評価においても、この領域における子どもの行動の発達的变化は著しく、特に園の評価では、大項目を含めた13項目の中の12項目において、4歳、5歳と急速な変化を示し、6歳の段階でそれが一段落するというパターンが見られる。図-24に大項目の結果を示しているが、大部分の小項目においてもこれとほとんど同様な結果が得られている。

園での子どもの活動の多くは集団という形態をとるので親の目に触れる自由な活動場面と比較すれば規則を守る行動が強く現われやすいのは当然ともいえる。しかし、親の評価においても年齢に伴う顕著な発達がみられるので、大人の指導によるだけでなく、子どもの自発的な活動の中にも規則を守るといった能力の発達が現われているものと思われる。

図-25は子どもの遊びの発達を示したものだが、これを見ても、子どもは5歳から6歳にかけて、ルールを理解する能力やルールに従って行動する能力が急速に発達することがわかる。ここでI型というのは、一人遊びが中心で、集団遊びに参加しようとしないう傍観的遊びの段階であり、II型は、

責任を負う、規則を守る(園)



責任を負う、規則を守る(親)

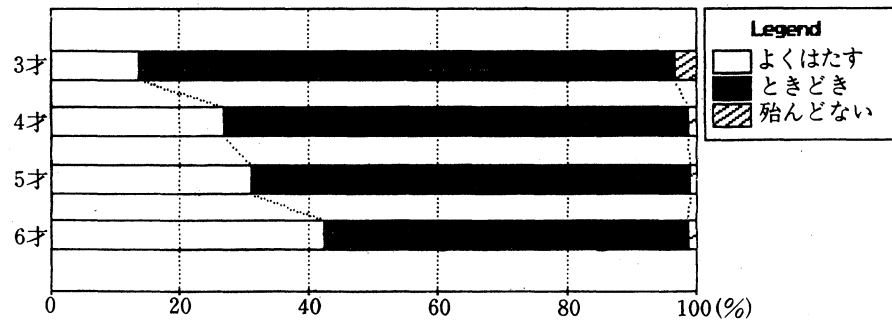


図-24 責任を負う、規則を守る

積極的に遊びに参加するが、遊びの中に秩序性がみられず一人ひとりが勝手に遊ぶといった段階。第Ⅲ型では、遊びは初めから言葉で方向が決められており、その内容には「ルール」が見られるものを表わしている。

9-2. 自律性 (自我意識)

図-26に大項目の結果を示すが、この領域においても親よりも園の評価で子どもは早い発達をみせており、しかもその差は子どもの年齢の上昇とともに大きくなる傾向を示している。自律性とか自我意識が、仲間との集団

活動を通すことによって一層明確な形で現われるものである事は従来から多くの研究で指摘されていることであるが、図-26もそれを裏付けるものであろう。

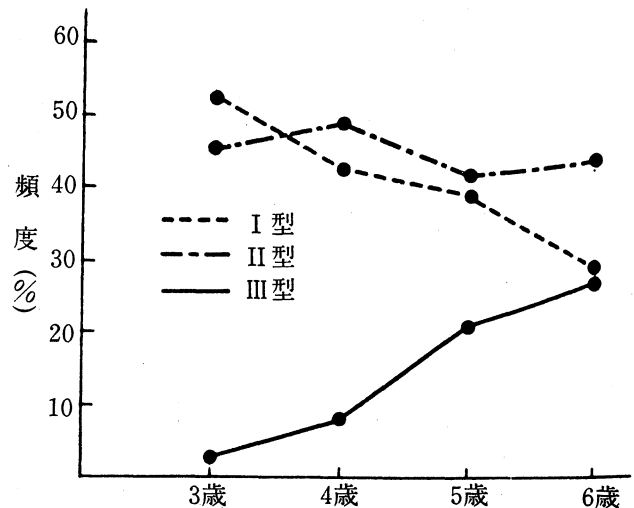


図-25 生活年齢と遊びの段階 (西頭三雄児, 1970)

要 約

3歳から6歳までの保育園・幼稚園の園児を対象に、その社会的発達を10領域(119項目)にわたって調査した結果、多くの領域で園での保育・教師による評価と親の評価との間に差がみられた

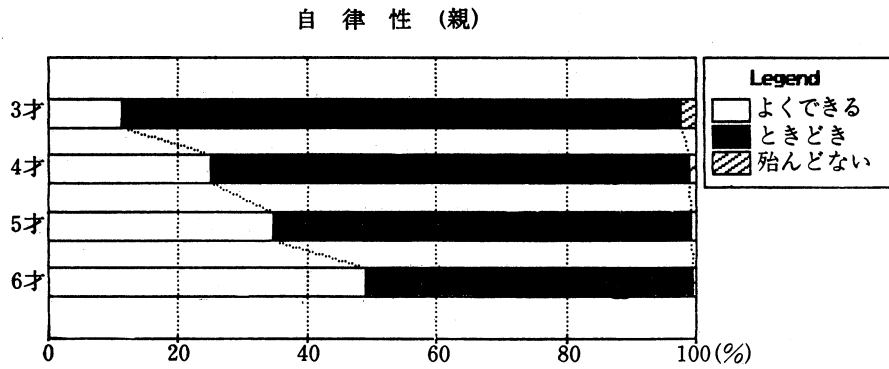
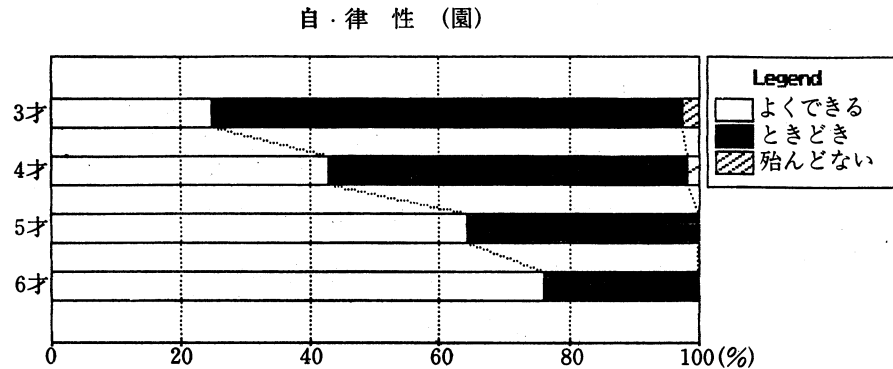


図-26 自 律 性

が、特にこの差は対大人関係において顕著であった。この事から、子どもの活動場所の違い（園の中であるか、あるいはそれ以外の親の目に触れるような場所であるか）は、対子ども関係よりも対大人関係での行動に大きな影響を及ぼすと考えられる。つまり、相手が子どもであれば園での仲間であろうが近所の子どもであろうが、対人行動にそれ程違いは生じないが、相手が大人である場合には、それが園の保母や教師であるか自分の親や近所の大人であるかという事は、子どもの対人行動に大きな違いを生じさせるという事である。

園での評価と親の評価の差が特に大きい領域としては、愛情、支配、従順、拒否、規則を守る、などがあげられる。すなわち、自分の親とか親戚や近所の顔なじみの大人に対してはより頻繁に愛情的な態度を示し、強い自己主張を行い、わがままで自己中心的な言動が見られるのに対し、園の保母や教師に対しては素直に従い、協調的であり、ルールを守った責任ある行動がとれるといった子どもの姿が浮き彫りにされた。また、対大人関係におけるほど顕著ではないにしても、このような傾向は対子ども関係においてもある程度認められた。

しかも、こういった領域では3歳児のレベルで二つの評価の間には相当に大きな開きがある。親と保母・教師といった評価者の違いは無視できない大きな要因ではあるが、それを考慮したとしても、子どもはかなり小さな時期から、公的な場である園での活動と私的な場における活動とをある基準に従って使い分けている事、また、そういった能力が十分に備っている事をこの調査結果は明らかにしたと思われる。

参 考 文 献

- Green, E.H. (1933) Friendship and quarrels among preschool children. *Child Development*, 4, 237-252
- 久世敏雄・小嶋秀夫編 (1977) 幼児・児童の心理 福村出版
- 西頭三雄児 (1980) 『遊びの発達』, 森上史朗編 保育のための乳幼児心理事典, 日本らいぶらり
- 大坪治彦・島田俊秀・松田君彦 (1985) 「幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅲ)―感情的発達を中心に―」
鹿児島大学教育学部紀要人文社会科学編, 第36巻
- 島田俊秀 (1980) 『社会的行動の発達』, 森上史朗編 保育のための乳幼児心理事典, 日本らいぶらり
- 島田俊秀・松田君彦・大坪治彦 (1985) 「幼児の社会的・感情的発達に関する研究(I)―方法論を中心に―」
鹿児島大学教育学部紀要人文社会科学編, 第36巻
- 依田新監修 (1977) 新・教育心理学事典 金子書房